

# 三浦綾子論(八)——『泥流地帯』『続泥流地帯』——

\* 小田島 本有

Motoari ODAJIMA

## A study of Miura Ayako(8)——Deiryuchitai ≒ Zoku | Deiryuchitai——

### 一

周知のように二〇一一(平成二十三年)三月十一日に発生した東日本大震災は、死者約一万六千人、行方不明者を合わせると約二万人近い犠牲者が出る未曾有の大惨事となった。このとき公益財団法人三浦綾子記念文化財団、全国組織の三浦綾子読書会は、三浦綾子の本を集め、それを被災地に送るといふボランティア活動を行った。その時、被災者の間でとりわけ人気のあったのが『泥流地帯』『続泥流地帯』であったという。自然災害に見舞われた人々が立ち上がる姿を描いたこれらの作品は、被災地の人々にとって心強い励ましとなったであろうことは想像に難くない。

『泥流地帯』は一九七六(昭和五十二年)一月四日から同年九月二日まで、『続泥流地帯』は一九七八(昭和五十二年)二月二十六日から同年十一月十二日まで、共に『北海道新聞』日曜版に連載された。

一九二六(大正十五年)年五月二十四日、十勝岳が大噴火を起こし、麓の上富良野村(当時)が泥流に襲われ百四十四名の犠牲者を出した。作品の中では、この時の泥流の速さは「六里余りを二十数分」と述べられており、単純計算すると時速六十キロ前後の速さであったことになる。簡単に逃げ切れる状況ではなかった。ちなみに現在、上富良野町には爆発記念碑というのがある。泥流のために流されてきた礫がそのまま置かれているのだが、高さ二メートルほど、幅三メートルほどの極めて大きなものである。これほどのものが流されてきたかと思うと、その時の泥流の凄まじさが想像できよう。

ところで、十勝岳大噴火を素材にした小説の執筆を勧めたのは三浦光世氏であった。氏は営林署に勤務していた関係で『十勝岳爆発災害志』を目にし、そこに『ヨブ記』と同様のものを感じ取ったという。だが、綾子は当初、「とても書けそうもない」と躊躇していたらしい。

この作品を執筆するにあたって、綾子は実に綿密な取材を行っている。例えば作中に登場する菊川先生には、菊池政美という実在のモデルがいた。菊池は日新小学校でただ一人教鞭をとっていた教師である。噴火の当日、菊池は正教員資格の検定試験のため旭川へ行っており、本人は災害を免れたが夫人と子供が犠牲となった。また、作品で描かれる上富良野村の街並みは正確である。さらに後述するが、『続泥流地帯』に登場する吉田貞次郎村長、沼崎重平、佐野文子はいずれも実在の人物である。

ただ、改めて断るまでもないことだが、取材だけでは小説は書けない。小説では想像力や構想力が求められ、テーマに沿ってこれらが駆使されなければならない。その点で綾子の力は卓越していた。

### 二

『泥流地帯』(以後、『泥流地帯』を正編、『続泥流地帯』を続編、とする)の結末では、主人公の石村拓一・耕作兄弟の家族(祖父・祖母・姉・妹)は泥流の犠

牲となり、そのことで弟の耕作が兄の拓一の前で嘆息する場面がある。

拓一が目をあけて耕作を見た。拓一は自分を見つめていた耕作に、「何だ？」

と、やさしく尋ねた。あわてて耕作は、

「なあ、兄ちゃん。まじめに生きている者が、どうしてひどい目にあつて死ぬんだべな」

と、先程の言葉をくり返した。

「わからんな、おれにも」

「こんなむごたらしい死に方をするなんて……まじめに生きていても、馬鹿臭いようなもんだな」

「……そうか、馬鹿臭いか」

拓一はじつと耕作を見て、

「おれはな耕作、あのまま泥流の中でおれが死んだとしても、馬鹿臭かったとは思わんぞ。もう一度生れ変わったとしても、おれはやっぱりまじめに生きるつもりだぞ」

「……」

「じつちゃんだつて、ばつちゃんだつて、おれとおんなじ気持だべ。恐らく馬鹿臭いとは思わんべ。生れ変わったら、遊んで暮らそうとか、生ま狡く暮らそうなどとは思わんべな」

耕作は黙つてうなずいた。

(正編「煙」八)

ここに一編を貫くテーマが存在する。

拓一の考え方は「誰にも見えん所でも、真心こめて生きるこつた」(正編「矢車」二)の言葉に凝縮されており、それは「正しき者には苦難がある」という聖書の言葉を大切にして生きた祖父の市三郎から受け継いだものでもあった(正編「土俵」五)。市三郎は「辛いこと、苦しいことを通して、神さまが何かを教えてくれるのかも知れんな。つまり、試練だな」(同)とも語っている。つまり、石村一家は貧しいながらも勤勉な家族だったのである。父の義平は事故のため亡くなり、母の佐枝は髪結の修業のため札幌に行つており、長らく家を離れている。引用した拓一のような言葉がストレートに語られるのは現代文学では極めて

珍しい。考えてみれば、これほどの愚直な生き方や言葉は文学者や文学の玄人たちが避けてきたものであった。だが、これこそ読者が心の底でひそかに求めてきたものではなかったか。

### 三

この作品は石村拓一・耕作という兄弟が話の中心になっており、ほぼ弟の耕作が視点人物として設定されている。耕作は拓一に対する憧れがあり、兄を通して耕作が自分を見つめ直す機会がしばしば描かれている。だが、弟にとって羨望の対象であった拓一も、小学校六年生の頃は夜に外へ出ることを極端に恐れる少年であった。その彼が後年逞しい青年へと成長したのである。

拓一を拓一たらしめているものとは何か。

まずは弟・耕作に対する思いの強さである。耕作は成績の良い生徒であった。その弟をなんとか中学へ行かせてあげたいと願う拓一は、祖父の市三郎を説得した。その結果、耕作の受験が認められ、耕作は旭川中学に一番の成績で合格する。しかし、たまたま姉の富が恋人の武井から結婚を迫られ、耕作のことが障害になってしまうことを漏れ聞いた耕作は入学式当日仮病を使って欠席し、入学を断念することになる。武井は耕作を自分のことしか考えず自分勝手だと富の前で非難していた。武井によれば、教育を受ければただ威張るだけだということである。この言葉が独断的であるのは確かだが、武井には教育を受けた人から蔑視をされた苦い記憶があるのかもしれない。また、後日叔父の修平も、耕作が中学に行かなくてよかつたと世間体を理由に洩らす場面がある。武井も修平も、耕作が中学へ行くことに反対していた。彼らがこだわるのは身分相応ということである。だが、耕作が意に反して中学入学を断念したことを知った時、拓一は彼を殴った。それだけ拓一にとつて耕作の中学入学は彼の夢でもあったのである。後年、耕作は代用教員の話があり、家計を第一に考えた彼はそれを受諾するのだが、この時も拓一は弟を師範学校に行かせてあげたいと真剣に考えていた。また、耕作が既の掃除の後かみぬきをしなかったのが原因で馬(名前は「青」)が亡くなった際、「おれが忘れたんだ」と泥をかぶつたのが拓一だった(正編「足長蜘蛛」四)。

拓一の思いの強さは曾山福子に対しても同様である。福子は耕作の同級生であった。福子の父親は博打と酒に溺れ借金を重ねている。そして挙句の果てには福

子を深城が経営する深雪楼に売った。

福子を二途に思う拓一は竹筒に少しづつお金を入れ貯金を始めた。福子を身請けするためである。これ自体微々たるものであり、貯まるかどうか心もとない。だが、この行為をつづけること自体が彼にとつて福子を思う証であり、意味がある。その姿を傍でいつも見ていた耕作は後日福子にそのことを伝えている。そのことを知った拓一は耕作に、そのようなことはすべきではないと諭す。それを聞いたら福子が「すまない」と心の負担を感じるからだというのが理由だった。

酒乱の父親の横暴に耐え切れず、福子が思わず外へ出てきて雪の上に寝て空を眺めている姿をこの兄弟が目撃する場面がある。雪に福子の寝た跡が残り、そこにそのまま拓一が寝る姿を見て耕作はドキッとした（正編「雪の道」六）。

あるいは福子が売られ女郎となるが、祭りの相撲大会で五人抜きが行われ、力自慢の拓一は周囲から参加を促されていたが本人は辞退していた。ところが、小菊（福子）をひいきにする男が登場したと知るやいなや、急遽拓一が勝負を挑んで勝ちを収め、最終的に五人抜きを達成する場面も描かれている（正編「土俵」三・四）。

このように、福子に対する拓一の一途な思いは作品の随所に見られる。だが、拓一はその思いを福子本人に直接伝えることもしないし、相手からの見返りも求めない。それが拓一なのである。

また、家族に対する思いも拓一にあつては殊更強い。正編の終わり近くで十勝岳が噴火し、家族が泥流に呑み込まれてしまった時、「耕作、おれ助けに行くっ！」「死んでもいいっ！耕作、お前は母ちゃんに孝行せつ！」と言つて泥流に自ら飛び込んだのも拓一だった（正編「轟音」三）。結局この時の拓一は泥流に呑み込まれて何もできず、気を失つたまま後に助けられるのだが、このように彼の行動は殆ど徒労のまま終わってしまう場面も多い。だが、彼はそれが役に立つかどうかという判断基準で行動するわけではなく、自然と身体が動いてしまうのである。純粹な気持の発露ということであろう。だからこそ、彼はこの作品の中で強烈な印象を読者に残すのである。

#### 四

一方、曾山福子に対しても作者は愛情を込めて描いているのが伺える。

福子は借金を重ねた父親に売られるが、この父親は娘を売った夜、酒に酔い、驚いて駆けつけた拓一・耕作兄弟の前で、「やかましいやい！俺の娘を、俺が煮て食おうと焼いて食おうと、お前ら餓鬼の知ったことかっ！」と言いつつ男でない。だが、福子はこの父親を恨む言葉を決して吐かないのだ。

幼い頃、正月に子供たちだけで上富良野の街へ出かけた際、耕作が誤って持っていた三十五銭を紛失する場面がある。そのとき子供たちは耕作のためにそれぞれが五銭ずつ差し出した。その中には福子もいたのだが、それはそのとき彼女が持っていた全財産だった（正編「雪の道」三）。彼女はそれを口にもしない。幼い頃から彼女にはこのように無私の精神が備わっていた。

その一方で、菊川先生が結婚し子供たちが新居を訪れる場面、彼女は皆が入った後、最後にひっそり一同の履物を揃えてから茶の間に入っている（正編「日追鳥」二）。

これらはいずれもさり気ない描写であるが、福子の性格が端的に示されていると言える。自ら前面に出ることはしないが、さり気なく気遣いのできる娘なのである。拓一がたまたま、「深城の節子って、めんこいべ」と言い、耕作が福子のことを念頭に置きながら「めんこくねえ」と答えると、すかさず拓一が「節子よ、福子のほうがめんこいわな」と返している（正編「矢車」二）。福子はまさに「めんこい」という言葉がよく当てはまる。

耕作も同級生の福子には好意を抱き続けてきた。だが、拓一が彼女への思いを弟の前でいつも告白していたこともあり、耕作はその思いを吐露することはできずにいた。それでも、この同級生同士は互いを思い合っていた節が伺える。それを示すのが、福子がお守りとして耕作にくれた白い石である。耕作はこれを大切に持っているが、この小石はいわば二人だけの秘密であった。福子に強く惹かれながらも、彼女に思いを寄せる兄の気持ちも十分意識する。このような板挟みの状態に耕作は置かれていた。

『泥流地帯』『続泥流地帯』は貧富の差、境遇の差という厳しい現実を描いた作品でもある。対照的なのが曾山福子と深城節子である。

福子の場合、先述したように自分が売られても父親を恨む言葉を吐かない。耕作はそれを偉いと思うが、拓一は父親の言いなりになる福子に批判的である。拓一からすれば福子は逃げるべきだったのであり、それをしないから父親をよけい

駄目にするというのだ。彼女は耕作の前だけでは、「ね、耕ちゃん。わたしね、時々死にたいって思うの」と、心の底を打ち明けていた。だが、その一方で、「でもね、わたし、体が腐っても、どこが腐っても、心だけは腐らせたくないの。心だけは……」と、気丈な姿も見せていた（正編「足長蜘蛛」九）。身体を売る仕事彼女にとつてつらい境遇にあるのは言うまでもないが、それでもそこを飛び出すことはできない。確かに彼女がなかなか行動できないタイプであったという一面はあるが、もう一つ自分が深雪楼を飛び出した場合に家族に迷惑がかかることを彼女は恐れていたのだろう。

一方、深雪楼を経営する深城の娘節子は、行動的であり、はつきりものを言うタイプの女性である。彼女は幼い頃から美貌の持ち主として人目を引いていたが、耕作に対する思いを隠さない。彼女が耕作本人の前ばかりでなく、仲の良い花井先生や近所の豆腐屋のご主人にも話していることから、その思いが本物であったことも分かる。望まぬ縁談が持ち込まれた時、彼女は家を飛び出すことまでしている。耕作を愛し続けるという点で彼女は終始一貫している。だが、当初、耕作には節子の言葉が俄かに信じられなかったし、節子に対してやや無頓着なところがあった。耕作は後年学校の教師になった時も、誠実な先生として周囲の評価を得ている。ところがこの作品において、耕作は決して絶対化されていない。彼にあつて誠実さと主体性のなさは表裏一体の関係にある。節子の真剣な思いを知る花井先生は煮え切らない耕作に対し、「まあ、先生つたら、年寄りみたい。分別臭い言い方をして。先生卑怯だわ」と批判の言葉を投げかけるのだ（正編「桜吹雪」一）。これは的を射た発言と言えるだろう。

そもそも節子が耕作に思いを寄せたのは、幼い頃の一つの事件がきっかけだった。

子供たちがたまたま入った山が曾山の土地であり、そこでぶどう狩りをしていたところに現れたのが深城だった。深城は強欲な男として知られており、福子の父親である曾山はこの男から多額の借金をしていた。さらに拓一・耕作兄弟の母親であり未亡人となった佐枝に言い寄り、それを逃れる目的もあつて佐枝が髪結の修業のため長期にわたつて札幌に行くと、今度は佐枝に関するあらぬ噂を立てる始末だった。

深城はそこにいるのが石村家の子供だと知るや否や、拓一・耕作の目の前で母親である佐枝の悪口を言い始めた。怒りに駆られた耕作は傍にあつた石を拾つて

深城に向かって投げつけた。それを深城は避けたため、その石は背後にいた娘の節子の額に当たつたのである。このことに怒つた深城は石村家に怒鳴り込んできた。「嫁のもらい手がなかったら、どうしてくれるんだ」と凄む深城に対して、思わず耕作が発した言葉が、「おれがもらつてやる！」だったのである。この時耕作は小学校三年生だった（正編「山合の秋」五）。この事件は節子にとつて二重の意味で衝撃的だった。

一つは自分の父親に真つ向から歯向かう人間がいるという驚きである。深城は金持ちだったがゆえに力を持ち、彼の前では阿諛追従する人間ばかりを節子は見てきた。ところが目の前にそうではない人間が現れた。しかもそれが小学校三年の男の子だったのである。

もう一つは、「おれがもらつてやる！」という耕作の言葉だった。節子の額にはかすかな傷跡が残つたが、耕作のこの時の言葉は節子の心にしっかりと刻印されたのである。それ以来、耕作は節子には決して忘れられない人になった。

耕作が旭川中学に一番の成績で合格しながらも入学を断念したという話を節子は人づてに聞いた。この時彼女は人知れず泣いたという。このことから彼女の耕作に対する思いの強さが伝わってくる。後年、耕作が師範学校に行かないことも彼女は気にかけていた。

いづれにせよ、節子の心に耕作がしっかりと居座つたのはこの小学校時代の鮮烈な記憶があつたからだだった。

このとき、深城は娘の顔が傷つけられたことに怒りを覚え、石村家に怒鳴り込んできた。この時の市三郎（拓一・耕作兄弟の祖父）と深城との会話は二人の考え方の違いを殊更浮き彫りにしている。

「深城の旦那、あんたあ金はたくさん持つてるかも知れんが、ものごとのわかぬねえお人だな」

「ものがわからん？　ものがわからんとは何だ、ものがわからんとは！」

キワがおどおどと出す茶に目もくれず、深城は怒鳴つた。

「そうでねえべかな。あんた、女の子の顔に傷ばつた、女の子の顔に傷ばつたよ、何べんも言いなさる。そりや無理もねえ。だがこのくれえの傷は何日もせんうちになおる。しかしな、大事な母親の悪口を言われてな、わしらの孫らの心に受けた傷は、生涯なおらんかも知れんぞ。顔の傷と、心の傷と、ど

つちが大事か、あんたは知らんのかの」

「決まってるなあ。顔の傷じゃ。その証拠に、人の体に傷をつけりや、駐在にしよっぴかれるが、悪口ぐらいでしょっぴかれた話は、聞かんわ。とにかく、万一、この子の顔に傷が残ったら、一体どうしてくれるんだ。嫁のもらい手になかったら、どうしてくれるんだ」

大仰な言い分だった。

(正編「山合の秋」五)

顔に受けた傷を重視する深城と、心に受けた傷を重視する市三郎の違いが浮き彫りにされている。前者は「駐在にしよっぴかれる」、すなわち法で裁かれるのに対し、後者は法で裁かれることはない。深城は法で裁かれることを重大なものと認識している。だが、ここで市三郎が言わんとしたことは、世の中には決して法で裁くことのできない罪があり、それは場合によつては生涯にわたつて影響を及ぼし得るといふ事実であった。

## 五

言葉には功罪が相半ばするという事実を、作者はこの作品を通じて訴えている。言葉には人を励まし、勇気を与える側面がある。事実、この作品の中では石村一家、あるいは耕作と菊川先生、耕作と福子などの間ではこれがしばしば見られる。これがいわば「功」の部分だとすると、その一方で言葉は人を傷つけたり、怒らせたりするきつかけにもなる。あるいは言葉で巧みに他人を陥れることもある。これがいわば「罪」の部分だ。しかも大抵の場合、言った本人は忘れてしまいがちだが、傷つけられた側はその言葉を長い間忘れることはない。

その象徴的な人物として武井シンがいる。彼女は拓一・耕作の姉である富が結婚した武井隆司の母親に当たる。富からすれば姑である。

通夜の席には、武井の父も母も来ていた。が、武井の弟たちは、誰一人顔を見せなかった。硫黄山の事務所のほうにでも出かけて行ったのかも知れない。

(あのおっかさんが、武井さんと姉ちゃんを殺したようなものだ)

柳の枝を四本立て、糊をつけながら、耕作は胸の中で呟く。通夜の手伝いをしながら、武井の母のシンは、加奈江にそつとこうささやいたという。

「こんな爆発で死んだら、何ぼかお上から銭がおりるもんかねえ」

驚ろく加奈江に、

「うちは隆司と嫁の二人だから、百円ももらえるだろうか」

シンはそうも言ったという。加奈江はぶりぶりして、耕作に告げたのだ。長男の武井が、家業の農業を手伝わずに、硫黄山に働らくようになったのは、生さぬ仲のシンに冷たさがさせたことではないか。

(正編「煙」四)

ちなみにシンと長男の隆司とは血の繋がりは無い。そのこともこのような言葉をシンに吐かせる背景にあつたのだろう。また、シンは別の場面でも、「……心がけのいいもんは助かるよ。むしろカジカの沢のもんは、よっぽど心がけがいいんだね」と言った(正編「煙」八)。姉を失った耕作にこの言葉がどう突き刺さったかは言うまでもないだろう。この泥流のために全滅した三重団体の人々は通常酒を飲まずに節制し、勤勉に働いていた人々であった。祖父・祖母・姉・妹を失った石村一家も日頃は地道な生き方を心がけていた人々であった。

我々は何か良い結果を得られた時に、つい「日頃の心がけが良かったから」と言いがちである。この他にも、「病は氣から」「男は家庭を持つて一人前」などという言葉などは人口に膾炙している。しかし、長らく病気で患っている人、結婚したくてもなかなか結婚できない男性がこれらの言葉を聞いたらどう思うか。これらの言葉があまりにも日常的に使われているということは、我々は無意識のうち他人の心を傷つけている可能性があるということだ。言っている本人は往々にして気づかない。大切なのは想像力であるということ。この作品は読者に伝えている。思えば三浦作品では、しばしば言葉の毒、無神経さという「罪」が描かれていることを想起すべきであろう。

ちなみに武井シンという名前にも作者の意図が込められてはいないか。英語で「シン」とは「sin」、すなわち「罪」を意味する。この命名には我々人間が本来的に持っている罪深さが暗示されているのかもしれない。

人々の言葉に傷つけられてきたのは拓一・耕作ばかりではない。深城節子もそうだった。彼女は幼い頃から、強欲な「深城の娘」というレッテルが貼られており、いつも肩身の狭い思いを味わってきた。当初、耕作も節子に対して同様の見方をしていたことは否めない。『泥流地帯』『続泥流地帯』は、耕作が深城節子という女性に対する見方を変えていくプロセスを描いた物語と捉えることもでき

るのである。

六

『泥流地帯』は教師のあり方についても問題を投げかけている。この作品では耕作を担任した二人の教師が描かれている。

菊川先生は耕作が信頼を寄せ、大きな影響を与えてくれた先生だが、彼は貧しい農家の出身で小学校しか出ていない。そのため分教場の代用教員を務めている。耕作が優秀であることに注目し、彼に中学校を受けるようさかんに働きかけてくれた。結局、耕作は旭川中学に合格しながらも入学を断念するのだが、そのことを誰よりも惜しんだのはこの菊川先生である。

もう一人は益垣先生である。彼は北海道庁の官員の息子で師範学校の出身であり、そのことに少なからぬプライドを抱いてもいる。ただ、年下の菊川先生は生徒に人気もあり、そのことに対する嫉妬の念も少なからず存在していた。

例えば、遅刻をしたり宿題をやつてこなかったりする生徒がいる。益垣先生は、それを「いけないこと」として叱る。確かにそれはタテマエとしてはその通りだろう。だが、この益垣先生はその子供たちの家庭の事情にはまったく関心を払わなかった。怒られた生徒の中に権太というのがある。彼は母親が病気のため臥せており、家の手伝いをしなければならなかった。たとえ先生に叱られたとしても、権太は家の手伝いを疎かにしないのである。彼は益垣先生から罰当番を言い渡されるが、それもいい加減にはしない。その辺は「誰も見ていない所で真心をこめて生きる」という拓一の発想とも繋がるものがある。

耕作は権太の罰当番に付き合ひ、彼からいろいろなことを学んだ。耕作自身は優等生であり、いつもそうあらねばならぬという観念にも囚われていた。そのこととは裏を返すと、「ほめられたい」「叱られたくない」ということになる。つまり、そこには絶えず自分は周囲にはどう見られているかという意識が働いている。権太の態度は、今までのそうした耕作の生き方に疑問を投げかけるものであった。耕作は、このようにして周囲の人から学べるものはしっかり受け止めることのできる生徒であり、その彼が学校の教師となるに及んでこの姿勢は必要なことでもあった。

耕作が受け持たれている学級が研究授業となり、このとき菊川先生が授業の参

観にやつて来た。授業担当は担任の益垣先生だったが、この日耕作は益垣先生の権太に対する態度に反発し、授業に積極的な姿勢を見せようとしなかった。後日菊川先生がそのことを耕作に問い質したが、それを聞いた菊川先生は、気に入らないと怠けていいのか、そして権太に対する益垣先生の態度が気に食わなかったと言ったが、そもそも権太の家の事情をおまへは話してやったのか、と反問している。これらのことから明らかなのは、成績が良いからといって菊川先生は耕作を甘やかしていないということだ。それは取りも直さず、耕作の大人としての成長を菊川先生が願うからである。

ただ、作者は益垣先生を否定的にだけ書いていたわけではない。泥流に呑み込まれて完全に死んだと思いついて耕作が学校に現れた時、益垣先生は涙を流して喜んでくれた（正編「煙」三）。作者はこういう姿も忘れずに書き込んでいる。

ところで、『泥流地帯』では綴り方の授業風景も描かれている。これは後年、北海道綴方教育連盟事件を素材にして書かれた『銃口』（一九九四年）にも繋がっているものである。坂森五郎という生徒と耕作の距離が縮まったのも綴り方が一つのきっかけだった。

五郎は五年前に母親を失っており、心を周囲に閉ざしていた。その彼が書いた綴り方が「まんま」である。その中で五郎は自分が飯を炊いたことを書いていた。それを讀んだ耕作は、先生も食べたかった、とコメントしたが、それを讀んだ五郎は握り飯を作つて耕作のところに持ってきたのである。これがきっかけで五郎は耕作に心を開くようになった。絵の時間、本来なら風景を描くべきなのに五郎だけは耕作の顔を描く。また自ら耕作の家を訪れるようにもなった。たまたまある時、せつかく五郎が訪れたものの家の農作業を手伝っていた耕作は会うことができなかった。

結局、これが五郎の運命を方向づけたのである。雨の日、下校時間に五郎が廊下で立っていた。この時五郎は、「先生雨降りの日は、畠は出ないもな」と話しかけ、耕作も「ああ、こんな雨降りじゃ、畠仕事は休みだな」と答えたのであった。この日、五郎は耕作に会えることを期待して耕作の家に向かい、その途中で十勝岳が爆発し、そこで発生した泥流に呑み込まれ犠牲となったのである。残された家族はなぜ五郎がそちらへ行つたのか、分からない。その理由は耕作だけが知っていたのである。

泥流の犠牲者となったのは坂森五郎だけではない。拓一・耕作兄弟の妹・良子もそうだった。十年近く会わなかった母親の佐枝から、五月二十九日に帰るという連絡があった。これを殊更心待ちにしていたのが良子である。母親と別れたのは彼女が四歳の時であり、母親の記憶は殆どないに等しかった。ところが五月二十四日に十勝岳が噴火し、良子は母親に会うことがかなわなかったのである。この災害のため、石村家では祖父市三郎、祖母キワ、妹良子、さらに嫁いだ姉の富、曾山家では女郎に出された福子と、兵役についた兄の国男以外の家族、さらに菊川先生の妻と子供、皆が犠牲者となった。

拓一と耕作が犠牲を免れたのは山の方から妙な音が聞こえることに気づき、確かめようと丘が上がったからだだった。もしそのまま家に留まっていたら彼らもあつと言う間に命を失っていただろう。彼らは祖父たちが家から逃げ出そうとしながら逃げきれず、襲いかかった泥流に呑み込まれるさまを目撃している。このあと拓一は家族を助けようとして、自ら泥流に飛び込み、そこには耕作だけが取り残されることになった。

皆死んでしまったと気落ちし、生きる気力を失った耕作の耳に入ってきたのが、かすかに助けを求める泥まみれの女の声である。耕作はこの女に助けられたような思いになってその女を救い出し、彼女に厚くこびりついた泥を書き落としていくが、それがなんと福子であることが分かった（正編「轟音」四・五）。

大自然の脅威が圧倒的な猛威で人間に迫る。このとき人間は実にちっぽけな存在であり、ひとたまりもない。そのような中で、誰とも知らないものの救いを求める人を助け出した耕作の行為に、我々は人間の尊厳を感じるのである。

## 七

『続泥流地帯』はとりわけラストシーンが印象深い。深城節子が曾山福子を深雪楼からうまく連れ出し列車に乗せることに成功したかどうか、拓一・耕作らが農作業をしながら固唾を呑んで待つ場面である。列車の窓から出されるのが白いハンカチであれば成功、赤いマフラーであれば失敗ということだったが、果たして窓から出されたのは白いハンカチであった。これを知って拓一は崩れるように稲の中にくずおれる（続編「汽笛」三）『続泥流地帯』は一九七八（昭和五十三）年二月二十六日から十一月十二日にかけて連載されたが、この場面はその前年に

公開された、山田洋二が監督した『幸せの黄色いハンカチ』のラストシーンが影響しているのではないか。ちなみに綾子は山田監督の『男はつらいよ』シリーズの大ファンであり、二人は深い親交があった。

ところで、続編において、綾子は実在の人物をしばしば登場させている。

吉田貞次郎は当時の村長である。現在は彼の住宅が上富良野町開拓記念館として残されている。上富良野村が泥流の甚大な被害に遭い、村の復興に賛成するか、それとも反対するか、村は大きく二分された。吉田は前者の立場であったが、復興に多大な税金を投入することを快く思わない反対派の中には村長の自宅に投石をしたり、彼を「泥棒村長」呼ばわりをしたり、挙句の果ては村長を提訴したりする者もいた。それらは作品の中でも描かれている。結局、村長は不起訴となったが、周囲が勧めたにもかかわらず村長は相手を訴えることをしない。この辺りは反対派から襲撃を受け変形治癒になったにもかかわらず、相手側には耕作の教え子もいたことを踏まえ訴えなかった拓一と繋がるものがある。吉田村長も拓一も、先人の意思を受け継ぐ覚悟が確固としてあり、その信念に揺るぎがないという点では共通している。

また、沼崎重平も続編では深城家を飛び出した節子や母親のハツを受け入れる重要な役割を果たしている。沼崎は茨城県出身、医者として美瑛村に入り献身的な医療活動で知られた。後に村民たちの強い要望で村会議員を務めたり、美馬牛駅の設定に努めたりした。その後彼は旭川の向井病院へ移っている。

佐野文字も、旭川で廃娯運動や受刑者の保護更生に力を注いだ女性活動家であった。もともと小学校教師であったが、同僚の佐野啓次郎と結婚したものの夫が九年後亡くなっている。矯風会の旭川支部長も務めたが、戦時中は国防婦人会長や東条英機首相の私設秘書を務めたりと意外な側面も見せている。

ところで、続編では村の復興を信ずる人間たちの姿が浮き彫りになってくる。深城をはじめとする復興反対の主唱者たちは根底に損得勘定があり、吉田村長を「泥棒村長」と呼んで憚らない。その中であつて、吉田村長とともに村の復興に賭ける拓一の存在が続編ではますます大きくなってくる。

この拓一をどう捉えるかで、耕作と福子は実に対照的である。

耕作は村の復興をひたすら信じ続ける拓一に対して、それが無駄な行為に終わってしまうのではないかと疑いを消すことができない。その思いは何も耕作一人だけのものではない。福子の兄で幼なじみでもある国男も同じことを拓一に進

言したりしている。その兄を「馬鹿」「可哀そう」と思いながらも、その一方で「偉い」「羨ましい」と感じる耕作もいた。ところが反対派の村民集会で毅然と自分の意見を述べる兄の姿を見て耕作の心は揺すぶられた（続編「雲間」四）。

一方、福子はずっと拓一の応援者であった。それを端的に示す場面がある。

福ちゃんだってつらいだろうと言う言葉を、拓一は飲みこんで言った。

「仕える、つかえる？　そう、事という字も、つかえると読むの。わたし、知らなかった。拓ちゃんは、ほんとに仕えているのよねえ。拓ちゃんのこの苦労で、この田んぼがいい田んぼになったら、百年後、二百年後の人たちも、この田んぼの美味しいお米を食べられるんだもねえ」

「福ちゃん！」

拓一は言葉をつまらせた。未だかつて、自分の仕事をそのように評価してくれた者はない。ほとんどの者が、只復興を危ぶむばかりなのだ。

（続編「路のとう」二）

この言葉が拓一を勇気づけたの言うまでもない。拓一と福子は互いの言葉が相手を励ますことになり、このことがしだいに二人の距離を縮めていくことになる。

深城家の長男で節子の兄である金一から福子が求婚された。その話を福子本人から聞いた拓一は、「福ちゃん、福ちゃんなあ、今より幸せになれるんら、お嫁に行ったほうがいいんでないか。俺はそう思う」「福ちゃん、幸せになれ。金一君って男、気持はやさしいんじゃないか。……だから、思い切って行けよ。な、福ちゃん」と、自分の思いを噛み殺して進言した（続編「同志」七）。だが、結局福子は求婚を断った。拓一の言う、「今より幸せになれるんら」という言葉が彼女の心を捉えたからであった。このような過程を通して拓一と福子が接近していくのは自然な流れであったと言つてよい。

## 八

正編、続編を通じて中心となるのは言うまでもなく石村拓一・耕作兄弟であるが、二人はいずれも誠実な態度で人と接するという点が共通している。だが、こ

の二人は対照的な姿も見せている。

耕作は幼い頃からの優等生であり、成果を求めて努力するタイプの人間である。そのことは裏を返すと、徒労感を味わいたくないという思いにも繋がるだろう。絶えず評価されたいという願望があり、叱られたくないという思いは小学校時代の姿にも既に見て取れた。

一方の拓一は、「しかし、俺はね。自分の人生に、何の報いもない難儀な三年間を持つということはね、これは大した宝かも知れんと思ってる」と語れる男である（続編「日めぐり」四）。彼はもう復興は不可能と思われていた土地の再生を願う行動していくが、そこには先人の思いをしつかりと受け止めようという彼なりの覚悟があった。「俺はな、いつも思うんだ。生きてるくせに文句を言うなどな」とも彼は言っている（続編「火柱」四）。彼は家族を助けようとして自ら泥流の中に飛び込んだ。そのまま死んでいてもおかしくなかったのである。助けられた命であるなら、その命を決して粗末にせず、それこそ「馬鹿」に徹して生きていこうとするのだ。周囲の目を気にする姿勢はそこには見られない。

苦労を徒労として捉えるのか、それとも修行として捉えるのか。もし後者のように捉えることができれば、それ自体が非常に意味あるものとなる。

ところで、拓一が難儀な三年間を持つことの意義を語ったとき、「佐枝だけが深くうなずいた」との一文がある。拓一の生き方にこの母親が深く影響していると考えられるもあながち無理なことではない。佐枝が拓一に対して具体的にどのような影響を与えたのか、本文だけではよく分からないところがある。ただ、彼女は上富良野を長い間離れていた時期にクリスチャンとなり、帰郷後は拓一に『ヨブ記』を貸していることが語られている。〈苦難〉を〈試練〉と捉える発想はまさに『ヨブ記』からのものである。

『続泥流地帯』は耕作が人間に対する見方を変えていき、それが成長の証となったプロセスを描いた物語ともいえよう。それは拓一、佐枝、節子それぞれに対してである。

拓一に対しては先述した。佐枝に対しては、途中この実母に十年以上会わなかったこともあり、再会後耕作はなかなか馴染めずにいた。佐枝の口数も少なく、なかなか感情を表に出さないということも影響していただろう。ところが、隣に住む村長の娘の弥生やおていはよく佐枝に懐いていた。

耕作が佐枝に対して抱いていた不満の一つは、姉や妹、さらには祖父母までが



泥流の犠牲者になったにもかかわらず、佐枝が泣く姿を見せなかったことにある。ところが、夜遅く咽喉が乾いて目が醒め、床を抜け出したとき、耕作は母が祈りながらも涙を流している姿を目撃した。それまで佐枝は息子たちの前では泣く姿を見せまいとしていたことを知り、「手をつけて詫びたい気持」に駆られるのである（続編「同志」三二）。あるいは、山が再び爆発したとき、佐枝は咄嗟に火の起きていた七輪を外に出し、その上に空いた鍋を逆さに伏せるといふ的確な行動を見せ、耕作を感心させる（続編「火柱」六）。さらに、深城が家を訪れ、そこで拓一との間で喧嘩になったとき、佐枝は「おやめなさい、拓一。深城さんもお帰りください」と静かに言うのだが、このときの声には「犯し難い威厳」があった（続編「火柱」七）。これら一連の姿を耕作は目にする事によって、母親に対する見方を変えていく。泥流被害のため福子は兄の国男以外の家族を失った。店が休暇の時、彼女は石村家を訪ねてくるのだが、そこには佐枝の存在が大きく影響していたのである。

## 九

『続泥流地帯』は、耕作が深城節子という女性を見出していく物語でもあった。節子は深城の娘として生まれ、父親を恥しながら生きて来た。その彼女に冷たい視線が常に向けられていたのも確かである。事実、耕作も当初は彼女に対してそのような偏見を免れなかった。

先述したように、耕作に対する節子の思いは幼い頃の投石事件以来、一貫していた。耕作が旭川中学に一番の成績で合格しながらも入学を断念したという話を聞き、人知れず泣いたのも彼女であった。深城節子は作品の進行とともにその存在感を増していく。

深城は後妻のハツに難癖をつけて、彼女を追い出すことをした。これは彼が別の女性との関係が深くなったための行動だった。節子はこの父親のやり方に納得せず、ハツと共に家を飛び出した。そして彼女は自立の道を求め、看護婦の資格を取ろうとするのである。ただ、ここで注目すべきは、彼女はただ家を飛び出したのではない。娘としての「分」を尽くすことも考えている。それは実の父親をまともにしたいということであり、彼女はそのような困難からも逃げようとはしない。

また、節子は深城の経営する深雪楼で雇われている福子を救い出そうとする。ある意味で、彼女は拓一と福子を結びつける推進者でもあるのだ。節子が姉のように慕っていた花井先生は、福子が拓一か耕作のどちらかに思いを寄せているのではないかと、節子に語ったことがあった。この言葉が節子には引つかかっていたはずである。想像をたくましくするならば、節子が拓一と福子を熱心に結びつけようとした行動の背景には、彼女の耕作に対する強い思いが反映されていたのかもしれない。

## 十

『続泥流地帯』を貫くテーマは「苦難」である。これは旧約聖書『ヨブ記』で扱われていた重要なテーマであった。

ヨブは十人の子供と財産を悲惨な事故で一挙に失った。その彼のもとに三人の友人が訪れる。彼らはこのような災いを受けるからには、ヨブに何か罪があったに違いない、と断じる。これにヨブは反論したため、彼らは激しい議論を展開する。そこにエリフが登場し、彼らの議論の仕方に問題ありと主張し、ヨブの独白を聴くのだ。そのとき主ヤハウエの大音声も響く。そして、ヨブはこう語るのがある。「私はあなたのことを耳で聞いていましたが、今や私の眼があなたを見たのです。それゆえ私は自分を否定し、塵芥の中で悔い改めます」。こうして彼は三人のために祈ったのだが、この後彼は再び健康を回復し、財産が二倍となり、七人の息子と三人の娘に恵まれ、百四十歳まで生きるといふ。

続編の結末近く、石村家の人々が会話をしている場面が描かれている。その場にいるのは拓一（兄）、耕作（弟）、佐枝（母）、修平（叔父）の四人である。

修平は真顔で頭をひねる。耕作が言った。

「叔父さん、俺もね、泥流の時から、同じことを考えていたんだ。だけど、今度兄貴のことで、改めて真剣に考えたよ。兄貴みたいな人間が、どうしてこんなひどい目に会ったかってねえ」

「それで？ 何かわかったか」

「わかったとは言えないけどさ。母さんや兄貴ともいろいろ話し合っただけわかったような気がするよ」

「ひとつだけ？ 何がわかったんだ？」

「それはねえ、いわゆる善因善果、悪因悪果についてだよ」

「善因善果？」

「うん、そうですよ。俺たちはね、叔父さん。何か良いことがあると、それは何か良いことをしたからだとか、精進がよかったからだと考える。その反対に、病気になるったり怪我をしたり、災難に会うとき、日頃の心がけが悪いからだなんて考えてしまう」

「それが当り前だべ、耕作」

「その当り前だと思ってたことがさ、どうもまちがいなんだなあ」

「まちがい？ 何がまちがいなんだ」

すると、拓一が言った。

「叔父さん、俺も昨夜そのことを、病院で耕作に言われてさ。はっと思っただよ。現実には決して善因善果、悪因悪果じゃないんだなあ。そうあつて欲しいんだけどさ」

修平は不得要領の顔をした。

「それはねえ、人間の願望に過ぎないんだよ。理想に過ぎないんだよ。悪い奴は亡びてほしい。いい人間は栄えてほしい。そういうもねがつているうちに、悪いことがあれば、何の罰だとか、いいことがあれば精進がよかったとか、そう勝手に思うようになってしまったんだよ、きつと」

(続編「新秋」三)

このような会話が続いた後で、最後に佐枝は、「修平さん、わたしには上手に説明できませんけどね。今、拓一が言ったように、人間の思いどおりにならないところに、何か神の深いお考えがあると聞いていますよ。ですからね、苦難に会った時に、それを災難と思って歎くか、試練だと思って奮い立つか、その受けとめ方が大事なのではないでしょうか」(同)と語る。この佐枝の言葉は非常に示唆深い。

結局はその苦難を当人がどう受け止めるのかの問題なのである。少なくとも、続編での拓一は度重なる苦難を試練と捉えてきた。その姿に耕作や福子をはじめ多くの人々が心を揺さぶられてきたのである。

『泥流地帯』『続泥流地帯』は、十勝岳大噴火という事実を題材として取り上げ、『ヨブ記』を下敷きにした思想小説の体裁をとった。苦難のない人生は皆無

と云って良いだろう。その時々々の苦難にいかに向き合っていくか、そのことが人を成長させていく。

人間はちっぽけな存在である。大自然の前ではひとたまりもないことは、正編、続編が端的に示している。だが、人間は偉大な存在でもあるのだ。長い歴史において、人間は多くの試練と立ち向かい、それらを克服してきた。そこにこそ人間の尊厳もある。